

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：12611

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884041

研究課題名(和文)ローマ字本キリシタン資料の偏在的子音分布から再検討する日本語形態・音韻論史

研究課題名(英文) Reexamination of Japanese morphological and phonological history based on the uneven distribution of consonants in Romanised Christian materials

研究代表者

竹村 明日香 (TAKEMURA, Asuka)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・助教

研究者番号：10712747

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ローマ字本キリシタン資料の拗音節に見られる子音の偏在的分布に関する音声学の知見を以て、(1)奈良時代の上代特殊仮名遣いイ列・エ列にもこれらと類似した子音の偏在的分布が見られる要因は何か、(2)日本語動詞の活用という形態論的側面にも子音の偏った分布が確認されるのか否か、(3)硬口蓋化以外にアクセントもキリシタン資料に関連しているのか否かについて検討した。

結果、(1)には硬口蓋化子音の通時的・通言語的特性が影響していると推定されること、(2)には動詞の活用という形態論的側面においても子音の偏在性が認められること、(3)キリシタン資料にもアクセントの反映が一部あることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research examined the following 3 phonological and morphological problems. With the phonological knowledge of uneven distribution of consonants appeared the yo-on syllable (i.e. palatalized syllable) in Romanized Christian materials. I investigated (1) what factors are concerned with the similarity of the uneven distribution of consonants of Jodai-tokushu kanadukai in the Nara period, (2) whether this uneven distribution can be found in the conjugation of Japanese verbs, and (3) whether the pitch accent participates in this distribution besides palatalization in Romanized Christian materials.

As a result of the research, the following 3 points were shown. (1) Diachronic and cross-linguistic common character of palatalized consonants could affect the uneven distribution of consonants. (2) The uneven distribution of consonants can confirm the conjunction of Japanese verbs, that is the morphological aspect. (3) The pitch accent is partially reflected in Romanized Christian materials.

研究分野：日本語学

キーワード：拗音 口蓋化 キリシタン資料 子音 動詞 アクセント

1. 研究開始当初の背景

16-17 世紀の日本において刊行されたローマ字本キリシタン資料は、そのローマ字綴りの日本語表記が室町時代末期の音声・音韻を如実に伝えるものとして、戦前から多くの研究が積み重ねられてきた。しかし近年ではこれらの資料を用いた音声・音韻研究は完了の域に達した観があり、研究の潮流はその表記のあり方や印刷技術の方に移りつつある。しかし本研究ではこれらを音韻資料として再度取り上げ、従来注目されることの少なかった「硬口蓋化」と「子音」の観点から分析を加えることを試みた。その理由は、申請者の以前の研究においてローマ字本キリシタン資料のオ段拗長音に硬口蓋化の反映が確認されており、そしてその反映度が子音によって異なることが明らかになってきたためである。硬口蓋化と子音に相関性については、通言語的な研究が近年海外でも積極的に行われており、それらの成果を援用することで日本語形態・音韻史に新たな知見をもたらすことを目指した。

2. 研究の目的

本研究では、ローマ字本キリシタン資料から得られた硬口蓋化と子音の相関性に関する音声学的知見を以て、日本語史に残された以下の音韻論・形態論の問題について新たな解釈を提示することを目的とした。

(1) キリシタン資料の拗音節 (= 硬口蓋化音節) における表記分布が、奈良時代の上代特殊仮名遣いのイ列・エ列における表記分布と一致することに着目し、硬口蓋化が子音に及ぼす通時的・通言語的特徴と、音声的特徴が表記へ反映される要因について解明する。

(2) キリシタン資料の拗音節に認められた子音の偏在的分布が、日本語動詞の活用する行 (例: 夕行四段動詞) にも確認できるか否かを文献上から検討し、子音の偏在的分布が音韻論レベルだけでなく形態論レベルでも認められるかどうかを確認する。

(3) キリシタン資料のオ段拗長音における二表記には、硬口蓋化という音声的要因があることをこれまでに確認したが、それ以外に超分節音である高低アクセントの反映があるかどうかを確認する。高低アクセントの反映が現れていることが何を意味するのかという点についても考察を行う。

3. 研究の方法

上記の研究目的に合わせた研究の方法として、以下の検討を行った。

(1) 16-17 世紀のポルトガル語文法書である *Grammatica de lingoagem portuguesa* (1536 年)、*Grammatica da Lingua Portuguesa* (1540 年)、*Orthographia da Lingua Portuguesa* (1576 年) やポルトガル語史の文献を読解し、当時の表記の音価推定を行うと共に、キリシタン資料の拗音節表記に充てられた「i」「e」の音価を推定した。さらに上代特殊仮名遣のイ列・エ列に関する先行研究を整理・再検討し直し、硬口蓋化や子音に関する近年の海外論文の知見を援用しつつ、新たな解釈の提示を模索した。

(2) 日本語の動詞において活用する行が不均衡に現れる要因を追究するため、上代～近世までの動詞を収集し、子音の調音点別に分類したデータベースを作成した。さらに上述のデータベースを基に、活用する行を 4 種 (唇音の行、軟口蓋音の行、歯茎音の行、母音の行) に分類し、出現時期の偏在や各動詞の特色について記述した。

(3) オ段拗長音 (開音・合音) のローマ字表記において二表記で現れる語 / 現れない語を選び出し、それらの語と中近世期のアクセント資料 (『補忘記』、『平家正節』など) を対照させて分析し、二表記でゆれる語の場合には、高低アクセントの影響がどのようにあったのかを検討した。

4. 研究成果

(1) 16-17 世紀ポルトガル語の「i」「e」表

記の音価を検討した結果、当時のポルトガル語の「e」の表記には二つの音素が相当していることが明らかになった。よってローマ字本キリシタン資料の日本語拗音節における「e」表記は、従来の想定よりも広い音域を表している可能性が推定された。また海外の硬口蓋化に関する論文の読解の結果、硬口蓋化は唇音子音において有標（即ち、生じにくい傾向）であり、これは共時的な例に限らず、音変化などにおいて通言語的に見られる特徴であることが了解された。したがって、上代特殊仮名遣いイ列・エ列とキリシタン資料の拗音節という硬口蓋化に関わる両者の表記分布において、唇音（及び軟口蓋音）の音節と他の子音の音節において硬口蓋化が異なって現れているのは、硬口蓋化の通時的・通言語的特徴からみて妥当なものであり、表記上の偶然の一致によるものではなく、音声的要因が介在していることを示唆している可能性があることが明らかになった。

(2) 日本語の上代語の動詞には活用する行に偏りがあることが先行研究でも指摘されてきた。それらをまとめると、軟口蓋・唇音子音の行ではすべての行にわたって活用する行があるのに対し（【表1】）、歯茎音および母音・半母音の行では不均衡に活用する行が現れる（【表2】）という相違である。

【表1】上代語の動詞活用（軟口蓋・歯茎）

子音	軟口蓋音		唇音		
	カ	ガ	バ	マ	ハ
行					
四段					
上二段					
下二段					

【表2】上代語の動詞活用（歯茎音・母音類）

子音	母音・半母音			歯茎音					
	ア	ヤ	ワ	サ	ザ	タ	ダ	ナ	ラ
行									
四段	×	×	×		×		×	×	
上二段	×			×	×				
下二段									

上代語以降の動詞の活用も調査した結果、こ

の子音差による不均衡は中古以降も大きく崩れないことが明らかになった。例えば歯茎音の子音を活用の行にとる動詞は上代以降も極めて不均衡であり、/z/の子音をとるザ行は通時的に見ても四段（五段）動詞が存在せず、上二段動詞も中世以降に2語しか現れない。/d/のダ行四段（五段）動詞も中近世期に僅か6語現れるだけであり、/n/のナ行四段（五段）動詞においても、近世以降にナ変動詞から転換した数語があるのみである。このように、子音の偏在的分布は、動詞の活用という形態論的な側面においても観察されることが明らかになった。またその分布は唇音・軟口蓋音と、それ以外の子音（すなわち歯茎音）の別で異なって分布しており、それらは音韻的な考察において見られた子音の偏在的分布とも類似していることが明らかになった。

(3) ローマ字本キリシタン資料のオ段拗長音の部分がiとeの表記で揺れる例をアクセント資料と対照させて検討したところ、オ段開音を含む語の場合（例：屏風[びやうぶ]、明日[みやうにち]）、異例表記の「e」が現れる箇所は語頭に極めて多く、しかもそれらの大半は上昇調のアクセントに位置するものであることが明らかになった。反対に、語頭アクセントが平板調あるいは下降調になるものは本則表記の「i」で記されることが多い。ここから、異例表記「e」は上昇調アクセントと関連性のあることが窺えた。

一方、オ段合音を含む語の場合（例：微妙[みめう]、説教[せつけう]）、異例表記の「i」は語中・語末に多く偏って出現しており、それらの箇所のアクセントは平板調か下降調が大半であることが明らかになった。一方、拗長音の部分が本則表記の「e」で記されて「i」に揺れることが少ない語は、その部分が上昇調アクセントをもつ語（例：今日[けふ]、料簡[れうけん]）であった。

以上をまとめると、開音・合音を問わずオ

段拗長音の i と e の表記で揺れる語においては、「i」の表記の場合には平板調または下降調のアクセントと一致する例が多く、「e」の表記の場合には上昇調アクセントと一致する例が多いことが明らかになった。即ち表記の揺れにはアクセントも一部関与しており、それらには上昇調か否かという点が関わっていたということが指摘できる。

以上から、拗長音における i と e の表記の揺れは散発的な表記上のミスではなく、体系だった音声的要因が関わっていることが窺えた。一般的に聴音においては高アクセントが狭母音で聞き取られやすいことを勘案すると、これらはキリシタン資料作成者らの聴覚的要因により高アクセントの音節が「i」で、低アクセントの音節が「e」で聞き取られて記されたものと考えられる。これまでの研究では i ~ e の揺れは調音上の問題に起因すると考えていたが、聴音上の問題も介在していることが窺えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

竹村明日香 (2014) 「『日葡辞書』の開拗長音表記とアクセントの相関 漢語の例を中心に」『国文』122、査読有、pp.1-15 (左開き)

〔学会発表〕(計 1 件)

竹村明日香 (2014) 「『日葡辞書』の開拗長音表記とアクセントの相関 漢語の例を中心に」第 317 回日本近代語研究会秋季大会、於北海道大学(札幌市)、2014 年 10 月 17 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹村 明日香 (TAKEMURA, Asuka)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・助教

研究者番号：10712747

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし